



7月8日は開校記念日

宮城県村田高等学校 総務部



令和3年7月8日は村田高校の開校記念日です。本校は、大正13年(1924)に開校しました。開校記念日にあたり、村田高校の歴史を振り返り、本校で学ぶ意義をもう一度考え、今後の高校生活や、自己の将来を見据えた目標を再確認する日にしよう。【(町立)宮城県村田高等学校 開校日(1948.7.8)を記念日としています】

◆ 開校前の仙南地域の学校教育(大正10年頃)の様子



当時は小学校までが義務教育で、旧制中学校(現:中1~高2)に進学しようにも、仙南には大正10年まで、現在の白石高校と角田高校しかありませんでした。当時は交通の便が悪く、経済的にも大変で、進学を断念して働いた子どもたちがたくさんいました。何とかして地元で学校をつくらうとする運動が県内各地、特に仙南地域で大きくなりました。

◆ 村田高校の歴史



① 町立村田実科高等女学校時代(大正13年~昭和22年)

大正13年
1924年

村田町に
村田実科高等女学校設立

村田町の発展のためには、学校が必要だ。学校をつくらうとする機運が高まり、町立の実科高等女学校が設立された。(大正13年・1924年に創立)入学者数42名

② 町立村田高等学校時代(昭和23年~昭和40年)



昭和23年
1948年

宮城県村田高等学校となる
町立
普通科男子1クラス
家政科女子1クラス

戦後の学制改革により、義務教育は小学校・中学校となる。実科女学校は廃止され、新制の高等学校となり、村田高等学校となるが、県立移管はできずに、町立の村田高校定時制課程として出発する。
(その後、全日制課程設置は昭和39年)

③ 県立村田高等学校時代(昭和41年~平成6年)



昭和41年
1966年

昭和41年に県立に移管
県立
宮城県村田高等学校となる

現在の金谷の丘に新築校舎し、同時に町立から県立高校へと移管される。普通科と家政科の2学科で出発。昭和43年、自動車科設置、4クラスとなる。平成元年に校舎が新築されると電子機械科が設置され、4つの学科となる。

④ 総合学科時代(平成7年~現在)



平成7年
1995年

平成7年 総合学科に学科改編
21世紀にふさわしい
新しい高校となる

自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視する総合学科として、全国で8番目の総合学科高校となる。他の総合学科高校との大きな違いは、「資格の取れる総合学科」というスタイルを選択したことにある。

◆ 村田高校の伝統



本校の伝統(精神)は
何だろうか

- ✿ 80周年記念誌を読んでもみると、二つの伝統を読み取れます。
- ☞ 定時制高校時代の働きながら学ぶ過酷な毎日。共に声を掛け合って乗り越えてきた「負けるものか」という精神。
- ☞ 小規模な学校の中で、職員と生徒がなごやかで一体となり学校作りを実践してきた「師弟同行」という精神。

私たちは歴史と伝統に支えられている学校に学んでいます。「生活に活気、学習に意欲、行動に責任」を生活信条にして、自信と誇りを持って前向きに進もう。



町立実科女学校時代のトピックス



蔵王登山 (1926~1943)



卒業生談

「当時は、禁制があって「お山」は個人では行けなかったのです。蛾々温泉に一泊し、午前2時に起床して三途の川を渡って御来光を両手を合わせて拝んだのです。それが登山の一番の思い出です。ソックスを履いて、紐で体を結びあって、難儀をして登りました。」

元教諭談

「楽しい思い出といえば、心身の鍛錬を目的とした蔵王登山であった。現在と違って全行程を徒歩で、ひぐらしの鳴く山道を行き蛾々温泉に一泊。夜中に起きて真暗い中、懐中電灯を照らしながら石だらけの狭い山道を登った。賽の河原での朝食は、食料難の時代でおにぎり2個と水だけ、食べている周囲にどこからともなくたくさんの金蠅がうるさく群がってきたのを覚えている。生徒とともに山で食べたあの味は忘れられない。」



学徒勤労働員 (1944~1945)

元職員談

「1944年に学徒勤労令が布かれ、終戦1年前に村田実科女学校にも動員令が降り、3年生全員が仙台市原町苦竹の軍需工場に動員された。校長先生が先頭に立ち、全職員も参加して隊列を組んで壮行式に臨み、町長始め各位から激励の言葉を受けた。白鳥神社に戦勝を祈願し、町民の万歳と歓呼の声に送られて、さながら応召軍人が出征するときのように出発したのであった。冷やかな工場での作業は実に辛かった。作業を終えて、火の気のない寮に疲れた身体を横たえ、故郷の話に花を咲かせては、お互いに励ましあったものである。満足な食事も与えられず、生徒は次第に青ざめてくる者も出てきたので、3・4人ずつ交替で、家へ帰って食糧の補給をさせたのであるが、帰るにも汽車の切符がなかなか手に入らないので随分苦勞をしたものだ。仙台空襲、工場への爆撃があった時には、生徒全員の無事を確認し、うれしくて男泣きに泣いた。しかし、次第に生徒の間にも病気になるものも出てくるようになったので、女の先生方も看病で忙しかった。」

【創立100周年】に向けて
同じルートでの「蔵王登山」の
復活はどうだろう？ いいね！



「母校」について (内田より)



某年1月某日、午前4時40分。目覚しなして起きたウチダは、シャワーを浴び、いそいそと身なりを整えた。コートデュロイの上下、その下にはあったかインナー。半値で買ったカンタベリーのダウンジャケットを羽織り、母校のネーム入りネックウォーマーに首を通せば完璧だ。灯りを落とし、静かに玄関へと向かう。家の者は私の行動をつゆほども気付かず、未だ夢の中であろう。迎いのタクシーは5時20分、まもなく来る。玄関のキーに手をかけようとしたとたん、後ろから腕を掴まれた。たちまち家の中に引き戻される。「何をする! ♠」振り返れば、いつの間にか八甲田山雪中行軍に行くのかと思えるほどの完全武装の家人が眼前に迫っているではないか。「はーっ、はっ、はっ。こーんなことだろうと思っていましたよ。真冬の夜明け前、タクシーを呼んでラグビー観戦とはご立派なことですねー。ほんと、卒業生のカガミですね。♡」行動を見透かされて、ウチダは開き直った。「とやかく言われることではないだろう。手を放しなさい。♠」「いいえ、放しません。どーせ、友人と約束しているんでしょけど、家族に黙っていくのはだめです。♡」「ほう。私の楽しみを奪おうというわけか。何と心の狭い話ではないか。♠」「面倒なことを言い始めましたね。よろしいです。あなたの母校愛を尊重しましょう。♡」「何をするつもりだ。♠」「言わずと知れたこと、お伴します。身支度はできていますから。あなたの母校は私にとっても母校と同じようなものよ。♡」たちまち玄関の外に出され、家人もろともタクシーの中に。「では、行きましょう。仙台駅経由、国立ね♡。」「ちょっと待て、チケットは? ♠」「大学のブースでチケットを入手できることぐらい知っています。♡」うなだれるしかなかった。夫の企みを見抜き、ついでに自らも楽しむようになるまでには、家人も30年近くの時を要したということなのであろう。

私事はさておき、母校はいいものである。卒業後、何年経っても母校を想う。思いの強さや母校に関われることの喜びは人それぞれだと思うが、卒業生として母校に向ける関心は、日常の暮らしの中で大きな楽しみとなる。

生徒諸君。令和〇〇年、甲子園アルプススタンドでの歓喜がまっている。㊦

